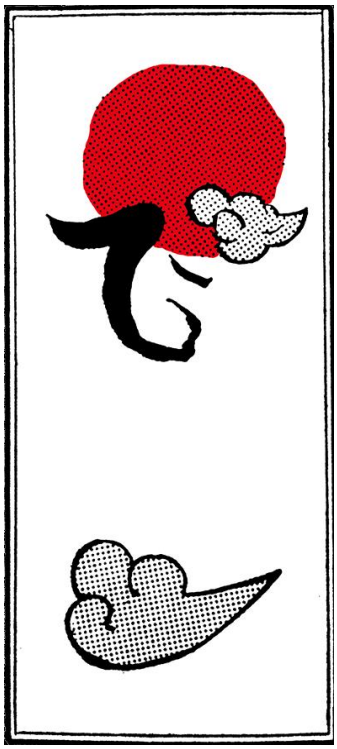

第17号
月1回発行
ひの心を継ぐ会
〒799-1336
住所：愛媛県西条市
上市甲720-1

領綱

一　私達は明徳を明らかにします
一　私達は国家の鎮護となります
一　私達は大和世界を建設します

神道（五）（大和世界の建設）

古事記

北と一（3）

―八卦と洪範九疇―

竹葉　秀雄

神霊界の真理、数霊の厳正荘厳なる世界の一端を窺うことにする。

易八卦の数理

説卦伝に云う。「昔は聖人の易を作るや、神明を幽賛して著を生ず。天を参にし地を両にして数を倚つ。変を陰陽に観て卦を立て、剛柔を発揮して爻を生ず。道徳に和順して義を理め、理を窮め性を尽くして、以て命に至る。」と。幽は深い、賛は助けるで、著は「めとぎ」で今は筮竹五十本を以って神明の幽理を助けるのである。天は陽にして奇数、地は陰にして偶数、一は数の始めであるから奇数として目せず。三を以て奇数の始とし、二を偶数の始めとする。この陰陽奇偶の変化を観て八卦また六十四卦とその爻三八二を生じ、これによって道徳に和順して義を理め、理を窮め性を尽して、以て天命に至るとするのである。

繫辞上伝に云ふ。「天一地二。天三地四。天五地六。天七地八。天九地十。天の数五。地の数五。五位相得て各々合うことあり。天の数二十有五。地の数三十。凡そ天地の数五十五。此れ変化を成し、鬼神を行ふ所以なり。大衍の数五十。其の用四十九。分ちて二と為し、以て両（天地）に象どる。一を掛けて三（天地人の三才）に象る。之を揲うるに四を以てして、以て四時に象る。奇を扐に帰して（左手の薬・小指間に掛ける）、以て閏に象る。五歳にして再閏なり。故に再扐して而る後に掛く。乾の策二百一十六。坤の策百四十有四凡て三百有六十。期の日に当る。二篇の策万有一千五百二十。万物の数に当る。是の故に四営して易を成し、十有八変して卦を成し、八卦にして小成す。引いて之を伸べ、類に触れて之を長うすれば、天下の能事畢る。道を顕にし徳行を神にす。是の故に与に酬酢す可し。与に神を祐く可し。子曰く。変化の道を知る者は、其れ神の為す所を知るかと。」筮法のことは暫くおいて、数について観るに、天は陽にして奇、地は陰にして偶。故に一三五七九の五は天の数、二四六八十の五は地の数である。天数の五は合すと合計二十五、地数の五を合すと合計三十。天地の数の総計は五十五となる。この五十五は一切の変化を成し、陰陽の屈伸消長即ち鬼神の作用をなすものである。衍は進衍とか敷衍のことである。一から十までを基本数とし十一から復円して無限の数に至るのである。その中一から五までは純数で（生は一であり、化は二であり、変は三であり、体は四であり、用は五である。故に数は唯五の外になく、真の正数基本数は五までであるとする。熊崎健翁）生数であり、六から十までは成数である。故にその生因たる五数（生気五行）を省いて大衍の数五十としたのである。この五十数の陰陽の変化の理を敷衍して天地万物の生成消滅、事の吉凶侮吝の理を明かにするのである。

元素は不変のものとされていたが、近代物理学は、神道で示されている世界に入り、気とか霊とかいうべきエネルギーが根元で、陽子、中性子、中間子、陰電子、陽電子などの素粒子は独立したものでなくお互に変化し合うこ

とが明らかにされ、元素も人工的に作られるに至った。易は「変わる」の理で、陽は陰に、陰は陽に変って八卦の小成の卦、六十四の大成の卦となり、それにとどまらず、無限の卦爻をなし時々刻々変化してやまないのであるが、ただ人はその神明の無窮玄妙にはいたり得ないのである。天文物理が宇宙の極大極微にいたり得ないのである。天文物理が宇宙の極大極微にいたり得ないと同じく。物理も実は数理なのである。

宇宙生成の原理、変化の神理は、数の定理真理によるのである。

ここに掲げたものは先天図不義　八卦といわれるもの、後天図は文王八卦図といわれ、これらの八卦を見つめていると、無限の言葉を聞くのである。八卦は神の数であり、神の声である。

第二章　農の史学的考察

～第一節　文質交替史観～

菅原　兵治

一、造化の本質

造化の本質とは要するに其のものをして其のものたらしむる本質的生命力である。我が国に於ける造化の本質は尊王の大義である。このものなかりせば日本は既に日本ならざる国家となる。我が国史に於て尊王の大義を忘るるに至る時は、如何なる文明も文化も、要するに浮文浮華である。

二、文質両態度の特徴

文質両態度に就いては、前章に於て既に其の本質を説明したけれども、猶本章に於て史的立場より之を見んとするに当り、特に明かになし置くを必要とする事項に就き左に表示することとする。

	文（浮文）的特徴	質的特徴
根本的特徴	理想精神萎微沈滞―従って内的感激薄らぎ、其の無感激の生活を補うべく外的享楽に趨る。	理想精神旺盛活発―従って向上心強く、内的感激盛んにして外的享楽に感心する暇なし。
個人的生活	一、生活が奢侈遊惰になり、唯物的享楽的となる。 二、功利に趨り、理智を誇る。	一、生活が簡素剛健なり。 二、義理人情を重んず。
国家的政教	一、法制設備徒らに煩瑣となるも、民心は弛緩す。華麗なる殿堂建築、土木工事が盛んに誇り行わるるに至る。（経済国難） 二、末梢的文化の贅積に狂い、国体の本質を忘れ、国民精神の昏睡を来す。（思想国難）	一、法制施設簡素にして、しかも上下緊張せる進取的気象を有す。 二、国民的精神勃興し、国民的活動が活発となる。

文質両状態に於ける世相の特徴は以上の表解によって大体了知し得ることと思うので、解説的叙述はこれを省略する。要するに人間に旺盛なる理想精神が失われて来ると、外的享楽に耽るようになる処から、其処におのずと浮文的世相が現出して来るのである。故に浮文的時相は必ず世紀末的時代に随伴する現象である。呻吟語に「士、鮮衣美食浮談快説して、日を玩び、時を惕(むさぼ)り、而して農工を以て村鄙となす。女、粉を伝(つ)け、花を簪(かざ)し、冷容学態袖手楽遊して、而して勤倹を以て恥辱となす。官、従を盛にし、供を豊かにし、繁文褥節、世態を奔逐して、而も教養を以て迂儒となす。世道為に傷心すべし。」といっているが、これ正しく浮文的生活の相であろう。然も世の凡衆は之を以て「文化人」「粋な人」「開けた人」「都人」の文化的生活として誇り、只管に感覚的享楽生活に耽る時、質的生活者は、簡素質樸な生活に甘んじつつ、実は裏(うち)に深く強き活力を潜蔵しつつあるのである。史上に一例を取れば、平安末期に於ける京都の公卿と、鎌倉の武士との対象がその適例であろう。泰時が夜半生味噌を嘗めて冷酒を飲みつつ国事を論ぜしが如き、些事ではあるが見逃すことの出来ぬ一事ではあるまいか。

かくて浮文的状態に陥ると思想的に於ても、経済的に於てもむだ花が非常に多くなる。随って思想国難、経済国難は当然の結果であって、之を救済する所以の道は実に帰質の一途にある。

思うに「明治維新」の精神は実に「王政復古」ではなかったか。日本国家に於ける「維新」は「復古」を其の本質とする。然し復古とは決して時代の逆行の言ではない。それは、実に「帰本」の言であり、「帰質」の言である。かくて現下の世相を顧みつつ私共は最も真剣に日本国家に於ける史上の文質循環の推移を反省すべき時ではないか。

千早鍛錬会に参加して

三浦　夏南

今月二十五日～二十七日の三日間、日本学協会主催の千早鍛錬会に参加させて頂いた。日本学協会は国史学者である平泉澄先生を師と仰ぐ会であり、大楠公が城を構えられた千早にて行われる鍛錬会は六十年以上の歴史を誇る。大楠公を敬慕する日本人の一人として伝統ある鍛錬会に参ずることが出来たことは大変な喜びであり、さらに班長の大任を頂き、僭越ながらも班の運営を任せて頂いたことは有難いことであった。

鍛錬会の目標は言うまでもなく大楠公の高潔なる大志を敬仰し、己自らが令和の楠公たらんとするものであるが、その道筋として先生方の講義を拝聴し、班会にて討議を行い理解を深める。さらに知的に理解するだけでなく、南朝ゆかりの聖地を廻り、肌感覚として当時の偉業を偲ぶのである。

後醍醐天皇様のお祭りされている吉野神宮、ここでは宮司様より南面すべき神社が北面している深意をご説明頂いた。本来神社は南向きに建てられるものであるが、時勢の為志成らず吉野に都を開かれた後醍醐天皇様は、常に京都に帰還し、正しき政治を行われることを望まれた。其の為、神社はその尊き御志の通り北は京都に向って建てられているという。その後に訪れた後醍醐天皇御陵も、同じく北面して居り、全く同じ御志が示されている。

雨天の為千早城に登ることが出来なかったことは非常に残念なことであった。前回、前々回と鍛錬会に参加して、この城での感動を印象的に記憶していただけに、尚更であった。その時に詠んだ歌が一首あり、鍛錬会の最後に提出する歌とした。

雨降るも　神の縁(えにし)か　秋雨に　濡れて光れる　城のきざはし

班会では班員に恵まれ議論を深いところまで行うことが出来、勉強になるとともに楽しいひと時を過ごすことが出来た。講義のテーマは大楠公、崎門学、世界情勢と多岐に亘るものであったが、どのテーマも掘り下げて行けば

必ず近代化の批判と農本自治の重要性となり、両極を結び行く皇室の国体原理となる。それぞれ非常な学識をお持ちの班員の方々との討論を通して、頽廃し行く現代日本の根底を洞察し、今後如何なる思想に基づき、如何なる具体策を実践して行くべきかを語り合えた時間は貴重なものであった。私が班長を務めた第二班は班員四人が皆三十代以下であったが、若い青年に戦後の所謂「保守」思想を越えて日本を根底から揺り動かさんとの大望が生まれつつあることを強く感ずる三日間となった。

聖地吉野の地にて大楠公の加護を受けつつ切磋琢磨することの出来る鍛錬会は尊いものであり、今後も参加させて頂ければ幸いである。

とよくも農園だより

三浦　美恵

猛暑が去り、とよくも農園にも時々爽やかな風が吹くようになりました。秋雨後に畑に出てみると、雫が蜘蛛の巣の上で光り、風になびいている姿を目にし、思わず見入ってしまいました。

今月は、ネギの定植と収穫・出荷、里芋の手入れ各畑の草刈りを行いました。

まずはネギの収穫についてです。今月は台風の影響で値段が上がり、先月の倍以上の価格、一箱三〇〇〇円になったので、少しでも多く出荷ができるよう朝から収穫に行きます。残念ながら台風で被害に遭ってしまい全国的にネギの収量が落ちると、無事だったネギの値段は跳ね上がります。一農家としては、少しでも野菜が高く売れることは嬉しいですが、その陰には泣いている農家がいると思うと、複雑な気持ちでの出荷です。

続いて里芋の草刈り、追肥、水張りです。自分達の背丈を越える葉をつけた里芋は、青い空の下気持ちよさそうに揺れています。八月が肥大期なので、追肥や水張りを行い、こまめに様子を見に行きます。九月半ばから収穫できるので、今か今かとその時期を楽しみにしています。

最後は草刈りです。夏の暑さと雨で、刈った側から草が生えてきますが、その草を刈ることも、大切な農作業の一つです。現在は刈った草をそのままにしていますが、行く行くは鶏を飼い、餌としてその草をやりたいと考えています。そして鶏糞を畑にまき、肥料にすることで、自給自足を進めて行きたいと考えています。今月はひの心を継ぐ会会員のうす井さんと、先月から勉強会に参加されている藤本さんが畑に手伝いに来て下さり、お二人とも精力的に草刈りやネギの収

穫・皮むきをして下さいました。お二人の姿を見ながら、将来的には、私達の家族以外にも有志の方が集まり、ともに農作業に勤しむ場所にとよくも農園がなればと思います。

今月来て下さったうす井さんや藤本さんのように、進んで農作業を手伝いに来て下さったり、資金面でひの心を継ぐ会の援助をして下さったりすることは、自給自足、自治、勤皇村建設への着実な一歩となるため、嬉しく思います。興味がおありの方は、ご一報ください。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

★活動報告

・八月七日（水）方向性相談会を開催。
・八月二十一日（水）勉強会『古事記』を開催。

★今後の豫定（よてい）

・九月四日（水）十九時～二十一時　三間村塾再建に向けて
　寺川正一さん旧宅（愛媛県松山市高井町六-三一）
・九月十八日（水）十九時～二十一時　『古事記』
　寺川正一さん旧宅（愛媛県松山市高井町六-三一）

★一燈照偶　万燈照国

ひの心を継ぐ会は竹葉秀雄・近藤美佐子両先生の精神を継承し、発展させることを目的として生まれた会です。一人の「ひ」の精神が周囲の人々の心に「ひ」を燈し、やがてそれが国を照らす「ひ」になることを願い、活動を行っております。皆様には何卒ご理解とご支援を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

年会費

・一般会員　三千円
・賛助会員　一万円
・特別賛助会員　三万円
・支援会員　一万円